常識の違い

(株) 国際電気通信基礎技術研究所
シャグダル・オユーンチメグ

Oyunchimeg Shagdar

1 ま え が き

私は、平成8年に来日してから留学生生活を終え、今は日本で研究者として勤めているモンゴル人の女性です。日本人とモンゴル人は顔立ちが似ていまして、私は道を歩いていても外国人にほとんど見られません。日本に住んでいるから当たり前ですが、朝はテレビで天気予報と今日の占いを見て出社し、会社では同僚と日本語で打ち合わせをし、お昼は味噌汁付定食を食べ、家に帰ればテレビに映るお笑い芸人の漫才に大笑いし、たまにはカラオケや居酒屋へ足を運びと、いわば日本漬けの生活を不自由なく送っています。しかし、日本に来たばかりの頃は、文化や習慣の違いに戸惑うことがたくさんありました。

日本は島国であり、外国からさほど干渉を受けずに守ってきた文化や習慣があります。日本食や着物や漫画など、日本が世界に誇る文化は数え切れないぐらいです。逆に言いますと、それだけ独特の習慣を持つ日本人は外国人と接するときにカルチャーショックといいますか、習慣や考え方の違いに戸惑うことがあるのではないのでしょうか。もちろん、相手の外国人も同じです。外国人と言っても、習慣や宗教が大きく異なる国がたくさんありますので、それらの国の人々を一くくりにはできません。しかし、私は、この15年の中でアジア、ヨーロッパ、アメリカ、アフリカ出身の学生や社会人に会う機会がたくさんありました。そして、彼ら及び日本人との関わりから、日本人特有の考え方というもの少し分かるようになりました。それには、周りへの気配り、時間と約束の厳守、強い責任感などと、外国人が口をそろえて感心することがたくさんあります。一方で、詳しくは後述しますが、外国人が共通して戸惑う習慣や常識もあります。国が異なると考え方や常識が異なることは当然ですし、その違いがあるからこそ、異なる国の人同士の交流は常に新鮮で楽しいものと私は思います。しかし、自分の常識により、スムーズな関係が築きにくい場合は、その常識を一端横に置いてから相手と接すると楽な

場合もあります。

国際化が進む今は、皆さんの周りに外国人が一人や二人、いるかもしれません。また、将来は、外国人と関わる機会がもっと増えることと思います。日本の習慣に理解のある外国人なら、日本人の感覚や常識に合わせて接するように心掛けるため、互いがカルチャーショックを受けることは少ないかもしれません。しかし、日本に来たばかりの人や、皆さんが外国に行く場合は、状況が異なります。また、日本の習慣に理解のある人でも、より深い関係を築くためには、自分と相手の習慣や考え方の違いを知ることが重要だと私は思います。そこで、本稿では、私個人が考える日本人と外国人の感覚や常識の違いについて書いてみました。少しでも参考になると幸いです。

2 言わぬが花

日本には「言わぬが花」ということわざがあります。その意味は「口に出して言わない方が味わいもあり、差し障りもなくてよい」だそうです。外国ではむしろ「人は言わないと分からないもの」という考えが主流だといえますので、「言わぬが花」はまさに日本美学だと私は思います。確かに、日本人は思ったことを口に出さない場合が多いのではないのでしょうか。その理由を日本人に聞きますと、日本人同士は口に出さなくても互いが分かると言います。しかし、多くの外国人は、日本人の「言わぬ」に戸惑うと言います。

日本人の「言わぬ」に「遠慮」が加わりますと、外国人にとって、日本人はもはや難しいクイズのような存在なのかもしれません。遠慮は人間社会で生きるには不可欠ですが、日本人は特に遠慮上手だと思います。幼い頃から他人様に迷惑をかけないようにと教わる日本人は常に遠慮を念頭に置いた生き方をしているのではないのでしょうか。一方、例えば、モンゴルでは、町に暮らす人はさ

写真1 著者があるイベントの準備中に

ておき、家族単体で暮らす遊牧民には遠慮はもはや不要かもしれません。町でも、重い荷物を持つ女性が横を通る見知らぬ男性に声をかけて荷物を運んでもらうことはよくあります。もちろん、相手が忙しそうにしている場合は遠慮します。お願いされる側も、都合が悪いなら断ります。一方、日本人は、「遠慮」するから赤の他人にお手伝いを頼むことも少ないが、頼まれる側も「言わぬ」だから断ることも少ないのかもしれません。両方の国の人同士では丸く収まる考え方だという気がします。

さて、「言わぬ」の日本人に「遠慮しない」外国人が何度もお手伝いを求めてきたらどうしますか。実は、私は日本に来たばかりのときは、分からない、知らない、が多かったこともあり、ある日本人によく助けを求めていました。相手の日本人はその都度、応じてくれました。しかし、私がその人に無理をさせていたことを、後になって第三者から知りました。私は、相手の口に出せない「お断り」を感じ取れなかったと反省しています。また、私から勝手にお手伝いしたこともありましたが、相手が私に手伝いを求めることはありませんでした。相手は遠慮していたのでしょうか。モンゴルでは、手伝い合うことが良い関係を築き、そして良い関係の証とも考えられています。したがって、あの時は、相手に手伝いを頼めない、そして、手伝いを頼まれたときに断れないというのは、もはやカルチャーショックでした。

さて、私はここで何が言いたいのかと言いますと、外国人は、日本人なら口に出さなくても分かることが、分からない場合が多いと思います。そのため、相手に伝えたいことなら、「言わぬ」でいるとすれ違いになってしまうかもしれません。その一方で、日本人なら言わない、言っても柔らかない表現で言うことを、外国人にズバ

りとストレートに言われ、傷つくことがあるかもしれません。そんなときは、外国人は物事をストレートにしか言えないと受け止めると楽かと思います。特に、外国語では普通の言い方が、日本語に訳すどうしても強い言い方になってしまう場合があります。日本語が堪能な人でも、母国語（外国語）で考えたことを日本語に訳して話すことが多いので、相手が日本語で話しているならその背景を理解してあげて下さい。また、「この人は遠慮しない非常識な人だ」と思いたくなる場合があるかもしれません。しかし、相手にとっては遠慮しないことが常識である場合がありますので、そのように理解してあげると相手を受け入れやすいかもしれません。

相手が外国人だからこそ、遠慮無用で気楽な人間関係が築けると私は信じています。

3 感覚の違い

国が異なると、笑う感覚、泣く感覚、傷つく感覚と、何かと感覚が違います。ここで、冗談について書いてみたいと思います。冗談が言える男はもてるという研究結果があるぐらい、冗談は話を盛り上げ、相手との距離を縮めせることもできます。しかし、冗談の在り方は国によって異なります。

私が最初に衝撃を受けたのが、「ボケと突っ込み」です。片方がボケると、もう片方が「違うやろ!」という感じで突っ込みます。突っ込む際に、頭をたたくこともあります。この光景は日本では冗談ですが、外国人には冗談として受け取られない場合があります。まず、多くの国では相手の頭を触るだけで相手を見下す失礼な行為になります。冗談で留学生の頭をたたいた日本人の学生に相手が怒り、胸倉をつかみ合う事態に発展している場を見

写真2 外国人が想像するモンゴルのイメージ

写真3 外国人があまり知らないモンゴルの風景（ウランバートル）

たことがあります。日本人の学生にとっては「冗談なの！」ですが、留学生にとっては「失礼な！」だったと思います。

もう一つ、「突っ込み」の際に、気を付けた方が良いのが、自分が男性で相手が女性の場合です。外国人の女性に、冗談のつもりでも「馬鹿」などと言って頭をたたくと、男女差別と取られてしまう恐れがあるからです。また、モンゴルなどの国では、「馬鹿」という言葉は、自分のことで使っても、他人に対しては喧嘩のとき以外は使えません。そのため、私も、大学時代に日本人の男子学生に「お前、馬鹿だなー」と頭をなでられたことがあります。『なんであなたに馬鹿呼ばわりされないといけないの！』と言い返し、気まずい雰囲気になったことがあります。彼は冗談のつもりだったのですが、そのときの私の感覚では冗談として受け入れられなかったのです。

ここでは、「ボケと突っ込み」を例にしましたが、その他にも常識や感覚が異なる場合が多々あります。上記の例は、相手に失礼になる場合なので、避けた方が無難だと思います。しかし、多くの場合は、さほど気にする必要はありません。ここで、私の思い出話を書いてみます。

学生時代に日本人の家に遊びに行ったときですが、日本人が「熱いからねー」と言いながらお茶を出してくれました。モンゴルは、冬は氷点下 30 度を下回る寒い国だからなのか、「熱い・暑い」という言葉は「危ない」などを付けない限りプラスの意味を持ちます。そのため、私は、「熱いからね」と出されたお茶を「熱いうちに飲んで」と解釈したので勢いよく飲み始め、今度その熱さにびっくりしていると、日本人が「だから、今、熱いと言ったでしょう！？」とびっくりしていました。今でも、思い出すと笑ってしまいます。やはり、異なる国の人同士の交流は、互いの違いに気付くと楽しいことが多いと思います。

4 最後 に

本稿では、日本人の感覚や常識の中で、外国人と異なる部分に関して書いてみました。皆さんの中に、いやいや、お互い人間ですから、相手の背景を知らなくても、なんとなく、と思う方もいるのではないのでしょうか。話を裏返すようですが、私もそのとおりだと思います。私は、特に学生の頃は、戸惑いながら、そして失礼を重ねながら、日本人の背景を少し覚えた気がします。これこそが外国人の背景を知る最も素直な方法ではないでしょうか。

しかし、外国人との接し方を覚える方法としてこんな地道な方法しかないのでしょうか。私はそうは思いません。実は、近年、私はモンゴルからも日本からも大きく異なる国々の方にお会いする機会がありますが、私は彼らに失礼をしないように、そして楽しい交流ができるように私なりの心構えをしています。ここで、参考のため、その心構えを紹介したいと思います。

私が外国人とお会いするときの心構えは「自分の常識を横に置く」と「相手に対して興味を持つ」ことです。「自分の常識を横に置く」の例ですが、モンゴルでは挨拶の際は握手や軽いキスをしますし、会話の途中でも相手の肩や腕に手を掴んだりスキンシップを大事にしています。しかし、イスラム教の国などでは、家族でなければ、異性間では特に、スキンシップは許されていないようです。イスラム教ではない日本でもスキンシップを余りしません。したがって私は、外国人とのスキンシップでは慎重を期するようにしています。日本人の場合は、本稿に触れましたが、相手の頭を触るなどの行為と似ているのかもしれませんが、「自分の常識を横に置く」の最も重要なことは、自分の常識や感覚の基で相手の行動などを解釈したり評価したりしないことです。これは難しいことですが、私は文化や習慣が異なる外国人にお会いするときは、相手を未知の世界の人と思うようにしています。相手が未知の世界の人だと「相手に対して興味を持つ」ことが自然にできる気もします。言うまでもないことですが、相手に対して興味がありますと、相手の文化的な背景を知りたくなりますし、相手がとても面白い存在になります。ほとんどの人は自分の国やその文化に対して興味を示す人に気持ち良く接してくれますので、お互いが戸惑うこともなく楽しい交流ができます。

この原稿は、今後皆さんが海外で活躍されるにあたって知っておいた方が役に立つかも、と私個人が思ったことを書いています。日本の習慣などに理解のある外国人なら別としても、そうではない外国人と接する際に少しでも参考になると幸いです。

シャグダル・オユーンチメグ（正員）

平 8 来日。平 12 高松高専卒。平 14 長岡技科大・工・電気・電子システム卒。平 16 同大学大学院修士課程了。同年（株）国際電気通信基礎技術研究所（ATR）適応コミュニケーション研究所に入所。無線通信の研究・開発に従事。博士（工学）。IEEE 会員。